
狐忠信 ~ 義経千本桜より ~

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

狐忠信 義経千本桜より

【Nコード】

N1400I

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

大和の吉野山に落ちてきた義経一行。その彼のところに恋人静御前が訪れる。しかしその共の佐藤忠信の様子がおかしく。歌舞伎の名作を小説にしたものです。愛のお話です。

第一章

狐忠信 義経千本桜

より

源義経には静御前という愛妾がいた。だが彼は兄頼朝に命を狙われ彼女と別れその身を隠さなければならなくなってしまった。

当然ながら彼女とも別れなければならず忠臣である佐藤忠信に彼女のことを任せそのうえで静に初音の鼓を手渡し落ちていったのであった。

だが九州に落ちることは適わず今は大和の吉野に身を隠していた。そこに彼と縁のある河連法眼がいて彼を頼ることにしたのである。

彼は吉野の僧兵達を仕切っていた。当時僧兵の力は強くそれはまさに一つの国家のようなものだった。頼朝もそこならば手出しはできなかったからだ。

その義経が隠れている館に今一人の若い武士が訪れてきた。義経が彼の顔を見ると実に懐かしい顔であった。

「おお、忠信ではないか」

「はい、義経様」

気品のある顔立ちの凛々しい若武者が義経の前に控えていた。その凛々しさは義経と比べても全く遜色のない程である。黒い旅の袴と上着、それに編み笠を持っている。

義経は彼の顔を見てすぐに。こう問うたのであった。

「して静は」

「静といますと？」

「だからだ。静御前のことだ」

彼は忠信が静を守るといったことを言っているのだ。

「無事か？それで」

「あの、それは」

しかしであった。忠信の返答は要領を得ないものだった。主の問

いにきよとんとさえしている。

「静様とは」

「だからだ。守ると言ったではないか」

「守るですと」

「そうだ、静をだ」

二人は問答を続けていく。しかしどちらも要領を得ないものだった。彼等は左右に桜の木がある館の前で話をしている。館の前は欄間があり義経は四段の階段の上にある館の廊下のところから忠信に對して話をしているのだった。丁度主が上座になっていた。

「言つた筈だ。覚えていないというのか？」

「御言葉ですが」

しかしやはり忠信の言葉は変わらなかった。きよとんとしたままである。

「何が何のことか」

「まさか御主」

義経は次第にその顔色を変えてきた。そうして忠信を怪しみだしだがここで思い直しもしたのだった。

「いや、それはないか」

疑おうとしたがそれを止めてしまったのだ。彼がそうしたような男ではないことは他ならぬ自分自身が最もよくわかっていることだったからである。

しかしであつた。彼の言う言葉にも矛盾がある。どうしたものかと思つているとここでまたしても来客が訪れたのであつた。それは。

「義経様、お懐かしゅうございます」

「何っ、そなたは」

今度来たのは華やかな外見の美女であつた。色香漂う面持ちであり赤い美しい衣に頭にはみらびやかな飾りがある。左手の杖と編み笠は旅をしていた証となつていた。

「静ではないか」

「はい、ようやくこちらに参ることができました」

こう義経に告げるのだった。彼女こそが静御前だった。彼女が今義経を慕いこの吉野にまでやって来たというわけなのである。

「それにしても」

「拙者ですか？」

「そうです。忠信殿」

静は今度は忠信を咎める顔で見えた。そうしてそのうえで彼に言うのだった。

「また見えなくなっていたと思ってましたら」

「またとは？」

「先に行つてらしたとは。いつものことはいえどこういうことですか？」

「どうしたもこうしたもです」

忠信は訳がわからないがそれでも言うのだった。義経にしる事情が全くわからずと惑っている。忠信はそこで二人に述べるのだった。

「私は今郷里から来たばかりです」

「何だとっ！？」

「そんな」

「いえ、本当です」

彼は真剣な顔でまた二人に告げた。

「もしや誰かが私に成り済ましていたのでは？」

「馬鹿な」

義経はそれを聞いてまずは首を傾げた。

「そのようなことが」

「いえ、そういえばです」

しかしここで静が義経に対して述べるのだった。

「こちらの忠信様は何か様子がおかしいような」

「様子がか」

「それにです」

彼女はさらに言葉を続けてきた。

「おかしなことがありました」

「おかしなこととは？」

「その忠信様はいつもすぐにおられなくなるのです」

「それもおかしなことだな」

義経はそれを聞いてまた述べた。

「忠信はすぐに姿を消したりするような者ではない」

「そうですね。しかもです」

ここで鼓を取り出してきた。あの義経から貰った初音の鼓である。

第二章

「この鼓です」

「うむ、それをどうするのだ？」

「これを打つとすぐに出て来られたのです」

「おかしいどころではないな」

義経はそこまで話を聞いてあらためて首を傾げさせた。

「その話は」

「そうですね。これは一体どういうことでしょうか」

「そうだな。それではだ」

義経はその話を聞いてここで静に述べるのだった。

「今ここでその鼓を打ってみるのだ」

「これをですか」

「そうだ。すぐにな」

「わかりました」

「我々は奥に隠れておく」

静にこう告げて忠信と共に後ろの障子を開けてその中に入る。そのうえで隠れて様子を見るというのであった。

静は義経達が隠れたのを見届けてからその鼓を打ってみた。すると階段のところに忠信が現われた。まるでその音に聞き惚れているように階段にもたれかかって。

「何者！」

静はその忠信を見てすぐに小刀に手をやった。

「忠信様はおられます。ならばそなたは一体！」

「わ、私は」

その忠信は静が抜いたその刃を見てまずは素早く後ろに跳んだ。それはまるで動物のような動きであった。

「申し訳ありません。私は佐藤忠信様ではありません」

「では何者ですか！？」

きつい声でこの忠信に問う。

「人ではないようですが」

「実はです」

ここで彼は畏まり平伏しながら話をしつけいた。

「その鼓には訳があるのです」

「訳とは？」

「あれは桓武帝の頃でした」

平安の頃である。この時代から見てもかなりの昔である。

「長い間旱魃が続き人々は困り果てていたのです」

「そのようなことがあったのですか」

「そうです。そして雨乞いの為に大和国の千年狐のつがいを狩り出しその皮から鼓を作ったのです」

「ではこの鼓は」

「そうです」

その鼓を見て驚く静に対してまた告げたのだった。

「鼓を打つと忽ち雨が降り人々は救われました」

「そうだったのですか」

「それにより鼓は初音の鼓と名付けら宮中に入れられたのです」

「この鼓にはそうした縁があったのですか」

「そしてです」

だが忠信はさらに言うのであった。その鼓を見ながら。

「私はその鼓の子でございます」

「というと貴方は」

「はい、そうです」

答えると共にであった。白い煙が沸き起ると共に袴は黄色い毛でできたものになり尻尾が生えた。そうしてあの狐の耳が頭から出て来たのであった。

「やはりそなたは」

「そうです、狐です」

ここであらためて己のことを名乗るであった。

「親が殺された時私はまだ幼く一日も孝行ができませんでした」

「そうだったのですか」

「それがあまりにも悲しくどうしたものかと考えているうちに生き長らえ」

狐の言葉は続く。

「今に至るのです」

「そのようなことがこの鼓に」

「そしてです」

狐は話を感じ入っている静に対してさらに言うのだった。

「せめて両親がなっている鼓に添っていたいと思いい側にいましたが」

「その時に見たのですか」

「見るつもりはありませんでした」

こう断りはした。

「静様が困っておられたで忠信様の御姿をお借りしてその時にでした」

「ではやはり貴方が忠信殿に」

「そして義経様にいざという時は自分の名前を使うように言われたので」

その時のことも話していく。

「そうして狐の身で義経様の御名前を頂戴した有難さ」

話しているうちにその目から涙が出て来ていた。

第三章

「しかし今本物の忠信様に疑いがかかつては申し訳ありません。これはまさに」

涙と共に言葉を出していく。

「早く帰れという親の言葉。私には聞こえます」

鼓にも目をやるのだった。

「父上、母上私はもうこれで。さようなら」

こう言つて姿を消そうとする。しかしここで義経が出て来た。そうしてその狐に対して言うのであった。

「話は聞いた」

「義経様」

狐はまず彼の前に畏まった。

「その節は御無礼を」

「それはいい。しかしそなたも同じなのだな」

「同じといえますと？」

「知つてはいよう。私もまた親がいなかった」

義経はここで己のことを語ってきた。

「幼い時に父を殺され母を入道殿に奪われた」

「そうでしたね、それは」

「義経様……」

狐だけではなかった。静もまた今の義経の言葉に思わず目を伏せさせた。

彼の父義朝は彼が一歳の時には落ち延びる中で信頼していた者に湯の場で殺されている。そして母は自分の命を助けることと引き換えに清盛の側室となったのである。入道殿とはその清盛のことである。彼が出家したことから来る名であったのだ。

しかもだ。それだけではなかった。

「今も」

「はい、そうでした」

狐は義経の話に沈痛な顔になった。

「親とも頼む兄上に憎まれる有様」

それが義経なのだった。彼は生まれてから今に至るまで血縁の者との愛には恵まれていなかった。その自分自身と狐を重ね合わせていたのである。

「我が名を譲ったこの狐もまた。その私と同じか」

「義経様………」

「狐よ」

そして今度は狐に対して声をかけたのだった。

「そなたには私の名を授けたな」

「はい」

「では今からそなたのことを源九郎と呼ぼう」

その義経の名前である。

「静を助けてくれた礼をやりたい」

「礼なぞは」

「いや、それはならん」

謙遜して断ろうとする狐に対して優しい声で告げた。

「それでは私の顔が立たないではないか」

「そういえば確かに」

「だからだ。受け取ってくれ」

こう彼に言うのであった。

「是非な。それでやるものはだ」

静から鼓を受け取った。その彼の親から作られた鼓をだ。

「法皇様から頂いた大切なものだがこれをやろう」

「それは………」

「親であつたな」

義経の言葉はさらに優しいものになった。

「ならばこれで親孝行をするのだ」

「あ、有難き御言葉」

狐は最早何と言っていいかわからなかった。喜びのあまりまた涙が出るのであった。

「ではその鼓を」

「さあ、受け取るのだ」

実際に鼓を彼に対して差し出してみせた。

「そなたの親達だ」

「何という……」

鼓を受け取った彼はまさに感無量であった。喜びに身体を打ち震わせている。しかしこの場に。一人の僧侶が駆けつけてきたのであった。

「義経様、大変でございます」

「どうしたのだ？」

「法眼様からのお伝えです」

その河連法眼のことである。

「僧兵達のうち義経様を快く思っていない横川覚範が配下の者達を連れこの館に迫っています」

「何っ、それはまことか」

「はい、ですから早くお逃げ下さい」

「わかった、それではだ」

「いえ、お待ち下さい」

しかしここで狐が名乗り出てきたのであった。

第四章

「ここは私が」

「そなたが防いでくれるというのか？」

「その通りです。鼓を頂いた御恩」

このことを述べるのであった。

「今それを果たさせて下さい」

「わかった。ではここは任せよう」

「はい、それでは」

「よし、行くぞ！」

「義経殿お覚悟！」

そしてすぐに長刀や金棒を手にした僧兵達がやって来た。彼等の先頭にはとりわけ大きな、そうして何処か氣品を漂わせた男がいた。

「あれがか」

「そうです、あの男がです」

僧侶は義経に告げた。本物の忠信も出て来て彼は義経と静の前に刀を抜いて身構えている。

「横川覚範です」

「そうか。あれがか」

義経はその顔を見て。思い当たるものがあつた。

「まさかな」

しかし今はそれについては何も言わず刀を抜いた。そしてその彼にまた狐が言うのであった。

「では私が」

「任せたぞ」

「はい、それでは」

狐はすぐに攻め寄せてきた僧兵達に向かって右手の首を上から下に動かした。すると僧兵達はその動きに合わせたかのように転んでしまったのだつた。

「うわっ、これは」

「何事だ!？」

「義経様に頂いた御恩」

狐は彼等を術で転ばせたうえで言う。

「それを今ここで」

「何っ、狐が貴様!」

「例え狐であろうとも!」

その長刀や金棒で再び襲い掛かろうとする。しかしそれよりも先に狐はまた仕掛けた。今度は青い火を自分の周りに次々と出してくるのだった。

「何っ、鬼火か!？」

「いや、違う」

僧兵達の中にはこの火が何なのかわかった者がいた。

「これは狐火だ」

「これがか」

「そうだ。気をつけろ」

仲間達に対して言うのであった。見ればそれは確かに狐火であった。青白い火球達はその狐の周りでゆらゆらと宙に漂っていた。

「この火は只の火ではない」

「何が起こるかわからないか」

「そうだ」

彼等は警戒し何が起こるか恐れていた。狐はその彼等に対し火を向かわせたのであった。

「行けっ」

「来たぞ!」

「くっ!」

僧兵達はその火の球を何とかその手に持っている長刀や金棒で消そうとする。しかしそれは適わずかえってその火に襲われるのだった。

「くっ、これはかなわん!」

「退け！退け！」

僧兵達の中の誰かが言った。

「ここは退くぞ！」

「狐が相手では仕方ない！」

こう言い合つて彼等は退いた。しかし一人だけ残っている者がいた。その彼に義経が声をかけるのだった。彼の左右には静と忠信が彼を守ろうと身構えている。

「御主は去らないのか？」

「そうだ」

僧兵達の先頭にいたあの横川覚範だった。彼だけが残っていた。

「私は去らぬ」

「御主の部下達は逃げ去った。それでもか」

「九郎判官義経よ」

横川は彼の名を言ってきた。

「私の顔を覚えているか」

「顔！？」

「そうだ、この顔をだ」

こう言つてここで己の顔を見せるのであった。

「この顔、見忘れたとは言わせん」

「まさか御主は」

頭巾でわかりにくかったがそれでもその顔を見た。するとそれは。

「平教経か」

「そうだ、私だ」

ここで己の正体を明かすのであった。

「私が生きていたことは知っていたな」

「如何にも」

義経は腹を括った顔で彼に対して応えた。

第五章

「まさかここに潜んでいたとは」

「この時を待っていた」

彼はその手の長刀を握り締めながら言うのだった。

「ここで貴殿から一族と帝の仇を討つ為にな」

「帝!？」

帝と聞いて義経の表情が変わった。

「今帝と言ったな」

「そうだ。それがどうした？」

「帝ならここにおられる」

彼はこう教経に告げたのだった。

「ここにな」

「馬鹿を言え。帝はもうお隠れになられた」

教経はそう思っているのだった。

「偽りを言うとは貴殿も落ちたものよの」

「嘘ではない」

しかし義経はそれを否定する。

「私が今まで嘘を言ったことがあるか」

「今言ったのがそれではないのか」

「違う」

それも否定するのだった。

「それは断じて違う」

「そうか。そこまで言うならばだ」

教経もそれを受けて言ってきた。構えは解かず間合いを少しずつ狭めていつている。静も忠信もそれを見て構えている。狐も何時でも術を出せるように階段の下で構えている。まさに一触即発であった。義経と教経も館の上と下で睨み合っているのだった。

「見せてみよ。その証を」

「帝をか」

「そうだ。生きておられるのだな」

彼はこのことを義経に対して言ってきた。

「ならば帝をここに」

「忠信、静」

「はい」

「何でしょうか」

「館の奥へ行くのだ」

こう二人に命じるのだった。

「そこから帝をこちらへ」

「はい、わかりました」

「それでは」

二人はそれに従いまずは障子を開け館の中に入った。義経はそれを見届けてからそのうえでまた教経二対して言うのであった。

「少し待っていてくれ」

「まことに帝がおられるのだな」

「そうだ」

このことをはっきりと告げるのだった。

「それは確かなことだ」

「まさか帝が生きておられたとは」

「知盛殿が守っておられた」

あの平家一門きつての傑物であった彼がである。

「私があの方から譲り受けたのだ」

「そうであったのか」

「だが。知盛殿はだ」

ここで義経の顔が残念なものになった。

「自ら命を絶たれた。立派な最期だった」

「そうか」

教経はそれを聞いて述べた。

「亡くなられたか」

「だが帝はおられる」

このことをあらためて教経に告げるのであった。

「だから安心してくれ」

「わかった。ではまずは待とう」

こうして彼は義経の言葉を信じることにした。そうして暫くすると。

二人が戻って来た。その二人の間にいたのは。小さな美しい顔立ちのそれでいて気品に満ちた少年であった。教経はその方のお顔を
見てすぐに言った。

「帝・・・・・・・・」

「教経か？」

「はい、そうです」

満面の笑顔でその帝の御言葉に答える。

「帝、お久しゅうございます」

「無事で何よりだった」

「はい」

己の前に来られた帝に対して跪く。今二人の絆が戻ったのだった。
教経はその帝を抱きかかえそのうえで義経に顔を向けて言うのだ
った。

「判官よ」

「うむ」

「まずはこのことに礼を言う」

帝との再会のことについてであった。

「この恩でこの場は引こう」

「そうしてくれるか」

「だが我等の決着はまだ着いてはいない」

だがこのことは言うのであった。

「また後日。手合わせを願いたい」

「わかった。それではな」

「その時まで。さらばだ」

こう言つて彼に別れを告げ吉野を後にする。帝も彼と共に吉野から去られた。

残つたのは義経達だけになった。狐は騒ぎが終わつたと見て義経に声をかけてきた。

「義経様」

「何だ？」

「私もこれで」

こう彼に対して言うのであつた。

「お暇させて頂きます」

「そうか。そなたも去るのだな」

「両親も戻ってきましたので」

言いながらその懷に抱いている鼓をいとおしそうに見るのであつた。

「私はこの大和の何処かで静かに暮らします」

「そうか。達者でな」

「それではこれで」

最後に義経達に一礼した。

「おさらばです。どうかお元気で」

「そなたもな」

彼等は笑顔で別れの言葉を交えさせた。狐は別れを告げると宙に浮かびそのまま飛び去っていく。最後に弧を描いて義経に一礼してそうして。そのまま彼の前から姿を消したのであつた。義経達は満開の桜達の中で何時までも彼が消えた空を見上げていた。回りに花霞が漂うその中で。

狐忠信 〽義経千本桜より〽

完

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1400i/>

狐忠信 ~ 義経千本桜より ~

2010年10月8日15時04分発行